

健全財政、そして安い税金をあくまでも信奉した。

首相になってまもなく、彼は自由党の大立物でトロントの「グローブ」紙社主ジョージ・ブラウンをワシントンに送り、米国市場の解放を要求して、互恵条約を更新しようとしたが、米上院はこれを拒絶した。彼は、歳入確保のために関税を若干引き上げはしたが、保守党が実業家や農民と組んで米国製品への高率関税を要求したときには、頑として耳を貸さなかった。関税とは、国民の五パーセントにしかすぎぬ人々を利用するために、九五パーセントの人に課税することだ、というのが彼の持論だったからである。

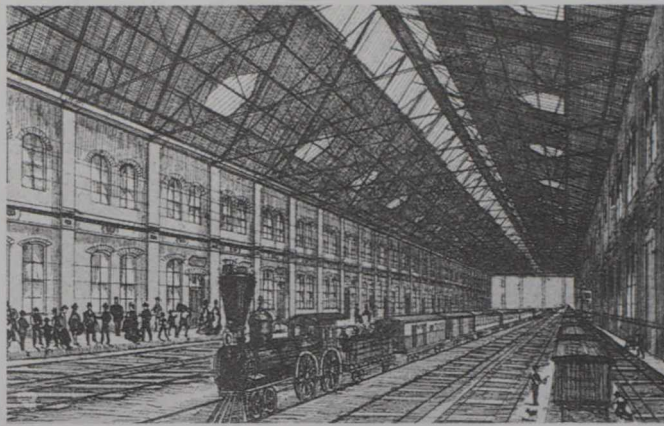
鉄道建設は慎重に

マッケンジーは、国の資力を超えてまでカナダ太平洋鉄道の建設を急ぐことはない、とも思っていた。民間企業の方でも、この不況時にあえて建設を強行しようとはしなかったから、彼は漸進主義をとおり、まずは五大湖の水路の間のいくつかの地域を鉄道で結ぶことにした。前首相のマクドナルドは、ロッキーを越える適当なルートが必ず見つかるかと信じて、

鉄道建設を推進したが、より慎重なたちのマッケンジーは、鉄道建設は人の定住と同じテンポで進めばよい、ロッキー越えのルートも、西海岸の終点候補地もいずればつきりするだろうという態度をとった。それは、人々の想像をかきたてる政策ではなかったが、少なくとも合理的で現実的な方法であった。エドワード・

ブレイクがいみじくも呼んだ。あの山々の大海原にたった一本の鉄道を通すために、オンタリオの税金負担が膨大になるのはかなわん——という感情があったことも事実だ。

一八七八年の総選挙に、五年間、野に下って精気いっぱいマクドナルドが、いわゆる「ナショナル・ポリシー」の大



1872年に改造・拡張されたトロントの中央駅ユニオン・ステーション。

構想をひっさげて再登場した。そのなかでマクドナルドは、製造業者、銀行家、農民から労働者に至るまで全ての国民を外国の経済攻勢から保護することを約束した。「いま初めて、カナダ人のためのカナダ」を主張する真のカナダ党が誕生したのだ」と、高らかに宣言しながら

最初から勝敗の決まった選挙戦であった。マクドナルドの強力なカリスマ性に對抗して、マッケンジーが武器としたのは、彼の真面目さ、政界浄化の実績、利権屋どもの手から公共の利益を守ったという自信——これだけしかなかった。政権の座にあった五年間、彼は自由党を強化する努力を一切しなかった。政治ゲームが嫌いで、有権者の支持さえあればうまくいくと信じ、人間管理の政治を等閑に付した。

この点で、マッケンジーは完全に間違っていた。ユーモア雑誌「グリッブ」は選挙後、マッケンジーを評して次のように書いた。「彼は事務員のように、ただ机に向かっていただけだ。ジョン・A（マクドナルド）みたいに、人びとと会って冗談をいったり、食事をおこったり、バーテンダーとふざけたりすれば党のためにもっとよかつたのに、彼はそうせず、例のごとく奴隷のように働いていた。マック（マッケンジー）の周囲には、酒のおいもおしやべりの声もしない」

一方、酒とおしやべりと「ナショナル・ポリシー」によって、マクドナルドは一八七八年、再び政権に返り咲いた。そしてマッケンジーは、次第に忘却の彼方へ押しやられていくことになる。

二年後、自由党は、党首をマッケンジーからエドワード・ブレイクにのりかえた。マッケンジーはその後、脳卒中でからだの自由を一部失いながらも、一八九二年に亡くなるまで下院議員として留まった——やや忘れられた存在として。

一八七〇年代の主な出来事

- 一八七一年 ●カナダ連邦最初の国勢調査を実施。総人口三百六十八万九千。
- ブリテイッシュ・コロンビア州、連邦に加盟。
- 一八七三年 ●北西騎馬警察隊（のちの連邦警察RCMP）を設立。米国からバッファローの毛皮を求めて、ウイスキーを積んだ馬車に乗って侵入してきた不法者の取締りが、最初仕事であった。●プリンス・エドワード・アイランド、七番目の州となる。●太平洋鉄道疑獄が暴露され、マクドナルド内閣が総辞職。●アレクサンダー・マッケンジー内閣発足。
- 一八七四年 ●総選挙で自由党勝利。●アレクサンダー・グラハム・ベル、オンタリオ州ブランフォードで電話の原理を発明。
- 一八七五年 ●カナダ連邦最高裁判所を設置。
- 一八七六年 ●ケベックハリファックス間にインターコンチネンタル鉄道開通。●マニトバ州、初めて小麦を輸出。
- 米国のカスター將軍に追われたスー族五千六百人が、カナダに逃れる。
- 一八七七年 ●日本人が初めてカナダに上陸（永野万蔵）。
- 一八七八年 ●総選挙（カナダ最初の秘密投票）。●第二次マクドナルド内閣。
- 一八七九年 ●保護関税を軸とする「ナショナル・ポリシー」、議会で承認。